
ゲーム人生

ポキリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲーム人生

【Nコード】

N9370Z

【作者名】

ポキリ

【あらすじ】

訳も解らず、ゲームの世界に飛ばされた主人公。
なにがおきるかは作者もわかりません。

第一話（前書き）

はじめまして。
初投稿です。

第一話

「大学中退してフリーターを8年、趣味もなく貴重な時間をネットゲームに費やす毎日…」

クズだな。

典型的なクズ人生だ」

緑色の眼鏡をかけた男は書類をめくりながら、そんな事を言いやがった。

「だがしかし。

そのネットゲームのプレイ時間が10万時間を越えるとは、非常に興味深い」

大きなお世話である。

「合格だ。

栄誉ある3人目のテストプレイヤーとして、君を採用する」

考える暇もなく、俺は意識を手放した。

抜けるような青い空。
辺り一面が、銀世界。

腰まで真白な雪が積もり、足跡一つ見付からない。

遠くを眺めても、雪山しか見えない。

あまりにもその状況に、考えがまとまらない。

ピローン

不思議な音と共に、空中にウィンドウが展開される。

【ラグナロクへようこそ】
緑色の文字が浮かんだ。

【貴方はこの剣と魔法の世界で、一人の冒険者として…】
なんだか長い説明が始まった。

どうやら、俺はゲームの世界に飛ばされたらしい。

【まずは広場にいる案内役に話しかけてみましょう】

「広場って言われても、どうみてもここ雪山だろう」

呟いた所でもうにもならない。

とりあえず、俺は町を探して歩き廻る事にした。

第二話

『限りなくリアルなネットゲーム、ラグナロク』

ヘルメットのような機械から脳に電気信号を送り、あたかも現実世界にいるかの様にゲームの世界を楽しめる。

正直こんな機械が世の中に出てくるのは、もう100年は先かと思つてた。

これ、軍事とか医療の分野で物凄い成果が出そうだけど、そんなニユース全く聞かなかつたな…

現在ラグナロクは本サービス前のテストプレイ段階。
テストプレイとは言うものの、参加者は10万人を越える大規模なものだ。

これを遊ばずとして何を遊べと言つのか。

友達を誘って応募をして、只今3人パーティーでフィールドを散策中である。

というか、

「これ絶対遭難ですよね」「寒い…」
調子に乗って歩き回っていたら、雪山に迷いこんでました。

2人の視線が痛い。

「え…えへへ…」
どう言い訳しようかと考えていると、効果音と共に文字が表示された。

【????に襲われました】

「!?!」

50m位先に白い狼の姿が見える。

「この距離で接敵扱い…」

「私達の敏捷度だと逃げるのは無理でしょうね」

モンスター名 ???
レベル ???

こんな遠くまで来たんだ、かなりの強敵のはず。

「ようし、やるぞー！」

私はモンスターに近づきながら、背負っていたロングソードを抜いた。

第三話

俺、黒野浩介。35歳。
気づいたらゲームの世界に飛ばされていた。

しかも雪山…

確かバイト帰りに…
うーむ。
これ以上思い出せない。

最初はゲームのやり過ぎで幻覚を見ているのかと思っていたが、記憶はともかく意識はクリアだ。

町を探して歩きながら現状を確認する。

持ち物は布の服のみ。
飾りつけのない麻生地だ。

空中にログが表示されたままだが、コマンドのリストやステータスウィンドウは見当たらない。

手元にコントローラーが有ればなあ…

【エナが救援を要請した】

「お…！」

新しいログが表示された。近くに人がいる。

救援要請に付いている矢印の指す方向へと、俺は走り出した。向かった先には、大きな狼と戦うパーティーの姿があった。

黒髪ロングで、白いローブのおねーさんが1人。

ショートカットにトンガリ帽子、黒いマントの女の子が1人。

そしてポニテのちびっこ剣士がひとり。

思わず見とれてしまった。

【????に襲われました】

どうやら戦闘に巻き込まれたらしい。

期待を込めて振り返った3人の表情が、失望のそれに変わっていきのがわかる。

布切れ装備のみで武器持ってないしな。

基本的な戦闘のシステムもわからないし…

戦況はPTが圧倒的に不利。

一撃で前衛の生命ゲージが半分近く削られてしまい、サポート役が回復に追われている。

こちら側の攻撃は一切通じていない様だ。
レベル差が有りすぎる。

こんな時こそ冷静に。

「…逃げるぞ」

考えうる最高の作戦を提案した。

そこからの行動はまさに、電光石火。

あっという間に戦闘から離脱する3人。

取り残される俺。

「……………」

一対一で狼と向き合う。

…でかい。5 mはあるぞ。

現実なら腰を抜かして何も出来ないんだろうけど、今の自分は驚く

ほど冷静だ。

流れる様な動きで敵に背を向け、全力で逃走を開始した。

「うおおおおお!?!」

突然視界が闇に包まれ、激しい勢いで飛び散る何か。どうやら頭からガブリと噛まれたらしい。

これはあんまりにも残酷な仕打ち。

暫くして、視界が開けた。飛び散っていたのが大量の血であるのが分かったが、痛みがまるでない。

振り返ると、口から血を流しながらぶっ倒れている狼がいた。

…何かやったのか、俺?

狼の牙が砕けていた。

そんな状態にも関わらず、起き上がってこようとしたので、思わず頭を殴った。

まるでトマトを殴ったかのような感触。

一撃で狼の頭を粉碎した。

「ちよ」

これはひどい。

周りから悲鳴があがった。

【シルバールフレヴ10を撃破しました。

LV差が大きいため、経験値が入りませんでした。

200Gを手に入れました】

第四話

「わ…私はナツキ、助けに来てくれてありがとう…」

ちびっこ剣士が話し掛けてきた。

怯えているな…コワクナイヨー

あ 目をそらした。

「私はサカキと呼んでください。…あなたは？」

丁寧な物腰で黒髪のおねーさんが挨拶してきた。

こっちは落ち着いてるな…改めて見ると凄い美人だ。おっぱいも大きいし。

「黒野浩介だ、よろしく」いかん、噛んだ。
落ち着け。

「ちよつと…それ本名？」

キャラ名だよ、キャラ名「ちびっこが若干引いている様だ。」

「キャラ名…？」

悪い、実は色々あつて状況が掴めてない。

自分が何故ここにいるか、そもそもここが何処かも解らないんだ」

とたんに怪訝な表情になる3人。

「…どついつ事だろ？」

それはこっちが知りたい。「不具合かなあ？
とりあえず、GMに報告はしておくね。」

さっきのお礼はしたいし、町まで行こっか」

『始まりの町』

と呼ばれるここは、キャラメイキングを終わらせたプレイヤーが最初に来る場所だそうだ。

にわかには信じ難いが、ここはラグナロクというネットゲームの中らしい。

「ゲームの中に入れるなんて、まるでマンガだな」

テーブルに並ぶ料理から立ち上がる香りは、現実となんら変わりはない。

「せっかくだから楽しみたいところだが、現実世界の俺がどうなっているのか分からないのがな…」

「せめてログアウトだけでもできればいいのにね」

などと言いながら、野菜のスープから弾き出したグリーンピースをせつせと俺の皿に盛るちびっこ。

好き嫌いは止めておけ、大きくなれないぞ。

「GMからの連絡が来るまでは、下手に動き回らない方がいいですね。」

ここで出会ったのも何かの縁ですし、これを渡しておきますね」

サカキさんが渡してくれたのは黄色のカード。

サカキさんの名前とか、能力値とか装備とかが書いてある。

「それはギルドカードと言いまして…クロノさんもそのうち貰えるはずですよ。」

名刺みたいなものですね」

剣士Lv5のナツキ、

僧侶Lv5のサカキ、

魔術士Lv5のエナ、ね…

…そついやこのエナって子はさっきから一言も話していないな。

警戒されてるんだろうか。

じっと見つめていたら、なんかすごい睨まれた。

どういふこと。

「それじゃあ、私達はそろそろ落ちるから」

「おつかれー」

「おつかねさま」

…わてと。

まずは宿でも探すかなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9370z/>

ゲーム人生

2012年1月1日21時51分発行